

受付No.

2026年度 アートによる地域振興助成（一般）

公益財団法人 福武財団 理事長 福武英明殿

募集要項に則り、本応募用紙に記載した通り、標記助成に応募いたします。

<団体プロフィール>

団体名	UNZENプロジェクト				
住所	〒855-0045 長崎県島原市上の町868				
団体区分	任意団体	スタッフ数	5名		
代表者氏名(カナ)	スナモリカズラ	役職	プロジェクトリーダー	年代	40代後半
代表者氏名	砂守かずら				
団体URL1	【X】https://x.com/UNZEN_PRJ				
団体URL2	【Instagram】https://www.instagram.com/unzen_project/				

<申請者・実務担当者> ※団体所在地と同じ場合は「同上」*申請者には、助成に関する諸手続きの連絡担当者の名前を記入してください。

申請者氏名(カナ)	オトモ マキ	役職	プロジェクトメンバー	年代	40代後半
申請者氏名	大友 真希				
連絡先 e-mail	m-otomo@tamabi.ac.jp	電話番号	090-5529-0242		
住所(書類の送付先)	〒192-0394 東京都八王子市鎌水2-1723 多摩美術大学アートとデザインの人類学研究所				

<プロジェクトリーダーの略歴> ※アートプロジェクト等の運営経験や当時の役割を記載してください。

氏名(カナ)	スナモリカズラ	役職/肩書	アートプロデューサー、写真家、砂守メディアアーカイブズ代表	年代	40代後半
氏名	砂守かずら				
年(西暦) 月	略歴(活動内容)				
2020年2月	原爆の図 丸木美術館 砂守勝巳写真展「黙示する風景」企画協力(監修 榎木野衣)				
2021年4月	ニコンプラザ東京 THE GALLERY セレクション展「CONTACT ZONE」企画協力(監修 石川直樹)				
2021年7月	まちの寄り処 森岳 砂守勝巳写真展「黙示の町」企画				
2022年5月	「アートルネッサンス・新歩の時」企画・プロデュース(映像製作 関根光才)				
2022年6月	企画展「UNZEN--「平成の島原大変」」企画・キュレーション協力(監修 榎木野衣)				
2023年9月	「Cultural Typhoon 2023」実行委員会委員、「ははの壁」プロジェクトオーガナイザー、出品作家				
2024年1月	「前橋映画祭2024 MAEBASHI MEDIA FESTIVAL」実行委員会委員				
2025年6月	東京藝術大学大学美術館 陳列館 展示「不和のアート：芸術と民主主義 vol.3」企画協力、出品作家				
2025年7月	土門拳写真美術館 展示「写真家と戦争の軌跡」出品協力				
2025年8月	展示「釜ヶ崎メディアプロジェクトvol.2」企画・運営				

<福武財団の助成実績>

助成を受けて活動した年度
2025年度

<外部協力者の状況>

氏名	年代	組織名	所在地(市町村まで)	協力内容(できるだけ具体的に)
松下英爾	70代	島原中心市街地街づくり推進協議会	長崎県島原市	島原市の災害対策・復興に長年従事。災害関連資料や地域情報に精通しており、地域と行政・自治体との連携にご協力をいただく。
杉本伸一	70代	雲仙岳災害記念館	長崎県島原市	雲仙岳災害記念館 館長。所蔵資料の閲覧・貸出し、展示やイベントなどの連携事業にご協力をいただく。
小鉢公史	60代前半	彫刻家	長崎県島原市	島原市出身・在住アーティスト。地域文化・美術教育に詳しく、地元在住の住民やアーティストとの交流、制作・発表場所のご協力をいただく。
榎木野衣	60代前半	多摩美術大学	東京都八王子市	アドバイザー。現代美術の専門家の立場からプロジェクトの調査協力とご助言をいただく。
林昌平	40代前半	雲仙岳災害記念館	長崎県島原市	雲仙岳災害記念館 企画広報職員。展示運営サポートおよび広報促進、語り部ボランティアの紹介などにご支援・ご協力をいただく。

<活動内容・事業計画について>

表現手法	作品展示
活動テーマ	被災地（の地域振興）
事業名	UNZENプロジェクトー ー 自然災害と表現をめぐるアートプロジェクト
2026年度の活動期間	2026/04/01 ～ 2026/03/31
活動に従事するスタッフ数	5名

1. 団体の活動の概要

<p>UNZENプロジェクトは、2019年より長崎県島原半島に位置する火山・雲仙普賢岳とその噴火災害をめぐるアートや表現活動について、フィールドリサーチや展示を行ってきた。噴火から35年を迎えた島原は、火山防災・災害復興のモデル地域とされる一方で、当時の記憶を伝える被災者の高齢化が進み、継承のあり方が問われている。本プロジェクトでは「自然災害と表現」をテーマに、被災地と芸術表現の関わりを探り、地域住民とアーティストの協働による対話や展示を通して、災害の記録と記憶を新たなかたちで共有することを試みている。</p>
--

2. これまでの活動の沿革

申請事業の活動年数	4～7年	
年（西暦）	月	活動内容
2019年	6月	プロジェクト始動(6月3日団体設立)、島原市と南島原市において噴火災害遺構や関連施設の現地調査を実施
2021年	7月	砂守勝巳写真展「黙示の町」開催(長崎県島原市、まちの寄り処 森岳)
2021年	10月	地域協力者やアーティストに噴火当時の状況や体験の聞き取りを行い、関連作品や資料の調査を実施
2022年	6月	展示「UNZEN--「平成の島原大変」」企画協力(東京都八王子市、多摩美術大学)
2022年	6月	シンポジウム「表現と記録」企画協力・登壇(東京都八王子市、多摩美術大学)
2022年	12月	「定点」模型を南島原市深江埋蔵文化財・噴火災害資料館に寄贈
2023年	9月	「大浦一志--雲仙普賢岳/記憶の地層」展示見学(武蔵野美術大学 美術館・図書館)
2024年	3月	横田家跡地、普賢岳・平成新山、諫早神社「雲仙塚」など現地調査を実施(島原市、南島原市、雲仙市ほか)
2025年	8月	クロストーク「UNZENのはじまり・いま・これから」主催・運営（長崎県島原市）
2025年	11月	展示「UNZEN ART PROJECT 2025 つながる、はぐくむ」主催・運営（長崎県島原市）

3. 活動エリアについて

活動エリア	長崎県 長崎県 島原市/南島原市/雲仙市
活動エリアの特色 (歴史、文化、地域性、魅力など)	島原半島は古くから国内外との交流が盛んな土地であり、宗教的・文化的に多様な背景をもつ人々の往来や移住・定着を通じて、現在の地域文化や人々の気質が形づくられてきた。九州の西北に位置し、火山活動によって形成された地形をもつ半島では、雲仙・普賢岳の噴火により大きな被害を受けながらも、肥沃な土壌を活かした農業や温泉文化が発展してきた。火山と人の共生の歴史が評価され、2009年には日本で初めて世界ジオパークに認定された。キリスト教文化に関する史跡や雲仙災害記念館など、地域の歴史と記憶を伝える場も多い。自然・文化・人の営みが複雑に重なり合う地域である。
活動エリアの課題 (まず初めに、活動エリアにおける課題を簡潔にご記載ください。続けて、その課題の背景や詳細について、できるだけ具体的にご記入ください。)	島原は火山防災・災害復興のモデル地域とされるが、被災者の高齢化や若年層の減少により、当時の経験や記憶を次世代に伝えることが難しくなっている。地域内では多様な活性化活動があるものの分散がちで、人や事業のつながりは十分ではない。互いの経験や意欲を共有し、連携を深めることが今後の課題である。行政は観光や企業誘致に取り組むが、少子高齢化や若者流出の影響で難航しており、新たな魅力の発掘と移住者の呼び込みが求められる。地域内外への火山災害の歴史の継承と防災情報の発信も引き続き課題である。
貴団体の地域に対するミッション (活動の目的)	本プロジェクトは、「火山と大地」「災害と表現」「記憶と伝承」をテーマに活動し、特に「災害と表現」では被災地におけるアーティストの役割や表現の可能性に着目する。雲仙・普賢岳の噴火災害と復興は地域の防災や文化の礎となったが、被災者の高齢化や若年層の減少により、当時の記憶を次世代に伝えることは容易でない。地域内の活性化活動は分散傾向にあり、連携の強化が課題である。本プロジェクトは、住民やアーティストとの対話や展示を通じ地域文化への理解を深め、世代を超えたコミュニティ形成や新たな地域資源の発見を促すとともに、アートによる災害記憶の継承と地域活性化のモデル創出を目指す。

7. 2026年度プロジェクト評価の観点や指標をどのように設定しますか。

定性（状態的な目標）、定量（数値的目標）をお書きください。

本プロジェクトの定性目標としては、地域コミュニティの活性化が挙げられる。住民参加型のワークショップや展示を通じ、地域住民のアートへの関心や参加意欲を高め、アーティストとの交流を促進し、互いの理解を深めることを目指す。また、災害記憶の継承も重要で、雲仙・普賢岳の噴火災害の歴史や教訓を地域住民や次世代に伝えるプログラムを実施し、表現活動を通じて記憶を継承する。さらに、地域文化の再評価として、島原半島の文化や歴史に対する理解を深め、地域のアイデンティティ形成や文化資源の再認識に寄与する。

定量目標としては、ワークショップや展示の参加者数を把握し、次年度に向け増加比率を設定する。メディア掲載数は年間10件以上、イベント参加者の満足度は平均80%以上を目標とする。SNSフォロワー数は年間で30%増を目指し、地域内外への情報発信と関心の拡大を図る。これらを通じ、アートによる災害記憶の継承と地域活性化を両立させる。

8. 2026年度の翌年以降の、地域に持続的に関わる中期計画と将来ビジョンをお書きください。

※一般申請者は、その計画・ビジョンの展開がこれまでの活動の積み重なりどのように紐づいているかと、その展開に事業や運営体制をどのように反映していくかについてもお書きください。

UNZENプロジェクトは、雲仙・普賢岳噴火災害の記憶と地域文化を次世代に継承しつつ、アートを媒介とした地域活性化を継続的に推進する。地域住民、アーティスト、行政、教育機関との連携を強化し、地域参加型ワークショップやリサーチ、展示を実施することで、災害記憶や地域文化を再構築し共有する。地域内の活動が分散する現状を踏まえ、情報共有の仕組みやネットワークを整備し、互いの知見や意欲を共有できる機会をつくることでメディア露出やSNS発信を通じて地域外への情報発信も継続する。

将来的には、UNZENプロジェクトを通じて、災害の記憶や地域文化を“生きた資源”として社会とつなぐモデルを目指す。住民とアーティスト、行政や研究者が共創するコミュニティを定着させ、世代を超えた災害記憶の継承と地域資源の再発見を両立。島原半島での取り組みを国内外に発信し、防災・文化継承の先進事例として他地域への応用も検討できるだろう。災害の記憶を地域のアイデンティティや創造活動の源泉として活かし、アートを通じた地域活性化の持続的モデル構築を目標としていく。

9. 2026年度以降、複数年の助成を希望していますか？

はい

<活動の様子>



クロストークイベント「UNZENのはじまり、いま、これから」（2025年8月、Takagi. Apartment.）



展示に向けた地域アーティストとのミーティング（2025年10月、atelierミドカ）



展示「UNZEN ART PROJECT 2025 つながる、はぐくむ」ポスター（2025年11、島原市内4カ所）

